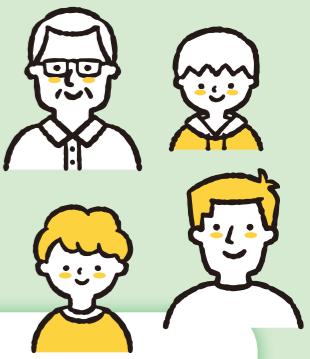


「男だったら〇〇すべき」はあなたの思い込み？



～「役割を果たす」生き方よりも、「自分がしたい」生き方を～

恋バナ収集ユニット「桃山商事」代表

清田 隆之 氏



1980年東京都生まれ。文筆業、恋バナ収集ユニット「桃山商事」代表。早稲田大学第一文学部卒業。これまで1200人以上の恋バナを聞き集め、「恋愛とジェンダー」をテーマにコラムやラジオなどで発信。朝日新聞beの人生相談「悩みのつぼ」では回答者を務める。桃山商事としての著書に『モテとか愛され以外の恋愛のすべて』『どうして男は恋人より男友達を優先しがちなのか』（ともにイースト・プレス）、単著に『よかれと思ってやったのに——男たちの「失敗学」入門』（晶文社）『さよなら、俺たち』（スタンド・ブックス）。新刊『自慢話でも武勇伝でもない「一般男性」の話から見た生きづらさと男らしさのこと』（扶桑社）が2021年12月に発売。

私は恋バナ収集ユニット「桃山商事」のメンバーとして、これまで1200人を超える人たちから恋愛にまつわる悩みや体験談を聞いてきた。話をしに来る人の大半が異性愛者の女性で、男性は全体の1割程度と多くない。しかし、ここ数年は増加傾向にあって、20代を中心に男性からの申し込みが続いている。また、男性たちの身の上話を聞き集めた新刊『自慢話でも武勇伝でもない「一般男性」の話から見た生きづらさと男らしさのこと』（扶桑社）を書いたこともあり、こちらからお願いでインタビューをさせてもらう機会も増えている。男

男性たちはどんなことに悩んでいるのか

男性の悩み相談の中で、経済的収入は代表的な相談内容です。パートナーからの言葉で傷つく場合もあれば、誰に指摘されることなく男性自らが苦しんでいる場合もあります。いずれにしても「男は仕事」という男性役割に縛られている男性ほど、自分が否定されたように感じてしまうようです。昨今ではパートナーの女性の方が高収入ということも少なくありません。こうした現状も伝統的な男性役割にとらわれている男性を苦しめます。内閣府男女共同参画局(2021年12月)の報告によると、男性雇用者と無業の妻から成る世帯(いわゆる専業主婦世帯)は、夫婦のいる世帯全体の23%となっています。「男性は仕事」という男性役

「収入が少ない」と言われる

東洋学園大学人間科学部 准教授

坊 隆史 氏



立命館大学大学院応用人間科学研究科臨床心理学領域修了。臨床心理士、公認心理師。専門は臨床心理学(産業心理臨床、男性相談)。著書に『産業・組織心理学—個人と組織の心理学的支援のために』(共著、ミネルヴァ書房、2020年)、『対人援助学を拓く』(共著、晃洋書房、2013年)など。

割は現状に沿わない時代になっていることを意識して、令和の時代に沿った新たなパートナーシップを模索していくことが大切です。

「男性だから」とリーダーシップを求められる

伝統的な性別役割意識が残っている組織では、男性がリーダーになることを求められる場合があります。例えば、学校のPTA活動において、男性というだけでリーダーシップが求められるため、参加したくても躊躇してしまうという相談を受けたことがあります。自分が組織を引っ張らないといけないと意気込んでしまう場合もあれば、女性が無意識的に男性を頼ってしまう場合もあるようです。これは男性と女性の双方に「男性がリーダーシップをとるべき」という伝統的な男性役割に依拠してしまっている例といえます。先ほどの調査では、上場企業の女性役員数は2012〜2021年の9年間で約4.8倍に増加していると報告されています。男性だからといってまとめ役となる必要はない時代になりつつあります。男性と女性双方ともこうした男性役割の縛りを解放していくことが求められます。

性別役割に縛られると生きづらい理由

いずれの例も「男性はこうあるべし」という男性的役割に縛られている典型例です。精神科医の宮地尚子さんは、ジェンダーについて「小さいこ

性たちは今、どんなことに悩んでいるのだろうか？

新刊からいくつかエピソードを紹介してみる。大手インフラ企業に勤める40代の男性は、トントン拍子で出世する一方、「自分の無能がバレしてしまっているのではないか……」という恐怖に怯えていた。彼は人付き合いが上手だという自己認識を持つ一方、自分が出世できたのは単に上司と仲良くできるからであって、実績や能力が認められたためではないと考えており、実力以上のポジションを得ている現実にかんがりのストレスを抱えている。

また、妻と不妊治療にのそんでいる20代の男性は、体外受精まで試みたもののなかなか妊娠に至らないことに精神のバランスを崩しつつある妻を前に、自らも「うつ病予備軍」と判定されるころまで追い込まれていた。子どもを産むからパスケエリートとして育ち、恋愛的にもそれなりにモテてきた彼は、建築会社の営業として毎晩終電まで働き、帰宅後は深夜まで妻の話に耳を傾けている。自らも本やネットで不妊治療について学んでいるが、なぜ妻がそこまで子どもを欲しがっているのか、なんとなく聞くのが怖くて根本の部分については話し合えないという。

自分の内面を言葉にしてみることから始めよう

男性たちの話からは、何かと上下や勝ち負けに還元してしまう価値観や、いわゆる「男性特権」と呼ばれるものへの無自覚、弱さを開示できない男らしさの呪縛や、男性間で発生するイジリやからかいがもたらすストレスなど……様々な共通点が垣間見える。そしてそれは私にとっても他人事で

るからの「壁」や学習によって積み重ねられ、習慣化され、血肉となり、その人の立ち振る舞いを形成する」と説明しています。「男性はたくさん収入を得なければならない」、「男性がまとめ役にならなければならない」という性別役割に縛られている人は、女性が社会に参加するようになっていく現状と自分の価値観が相容れないため、迷いが生じて生きづらさを感じてしまいます。こうした生きづらさから脱却するためには、自然と身についた習慣を考え直していくことが求められます。

「ジェンダーの鎧」を脱いで自分の生き方を考えよう

無意識的に育まれた性別役割は、その人の生き方に根強く定着しています。こうした男性役割による生きづらさを意識している男性は「ジェンダーの鎧」を脱ぐことが大切です。また、女性も無意識的に男性を苦しめているのだという相互理解が求められます。一方で、男性と女性では生物学的な身体的構造が異なっており、性別による差異をなくすることは困難です。そのため、ただ単に性別役割を解消するだけではなく、双方の違いを尊重したうえで共生していく考え方が求められます。筆者は悩み相談の場で、自分のジェンダーに即した性別役割ではなく、自分自身で自分の生き方について考えることを勧めています。わたしたち一人ひとりが自分自身の生き方を考え、同時に相手の生き方を尊重するという姿勢は、性別役割の縛りから解放される大きな助けとなることでしょう。

はいられない問題だ。既存のルールやシステムに乗っかりやすいマジョリティ男性は自分について言語化を求められる機会が少ない。与えられた役割さえこなせば良くも悪くも目の前の現実に順応できてしまったため、「なぜ自分はそうしているのか」「自分は何を感じているのか」といった部分を言葉にするという発想が希薄だ。その結果、自分で自分のことがわからなくなっているのではないかと。自分の内面に広がる「空洞」をひとつひとつ言葉で埋めていくことが、男性問題を前に進めるための鍵ではないかと私は考えている。

『自慢話でも武勇伝でもない「一般男性」の話から見た生きづらさと男らしさのこと』(扶桑社、2021年)



妻に暴力を振るった経験、孤独と非モテに苦しんだ過去、元妻の浮気を黙認した義母に対する恨み……。10人の一般男性に、男としての「生きづらさ」を聞いたインタビュー&論考をまとめる。新潮社文芸誌「yomyom」連載を加筆し書籍化。

